【62】パータリ村の繁栄を予言する

釈尊はパータリ村（Pāṭaligāma）に城を築いていたヴァッサカーラ（Vassakāra）大臣の接待を受け、パータリ村の繁栄を予言する。釈尊に因んで、門とガンジス河の渡しにゴータマの名前が付けられる。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.081）；世尊は王舎城から、アンバラッティカー（Ambalaṭṭhikā）、ナーランダー（Nāḷandā）を経由してパータリ村（Pāṭaligāma）に行かれた。そのときマガダの大臣・スニーダ（Sunīda）とヴァッサカーラ（Vassakāra）はヴァッジ人（Vajji）の侵攻を防ぐために城を築いていた。世尊は天神がここに住居を構えつつあるのをみて、「このパータリプッタ城は最高の都となり、物資の集散地となるだろう（agga-nagaraṃ bhavissati Pāṭaliputtaṃ puṭa-bhedanaṃ）」と予言された。そして世尊の出られた門はゴータマ門（Gotamadvāra）、ガンジスを渡られた渡し場はゴータマの渡し（Gotama-tittha）と名づけられた。

①Vinaya‘bhesajjakkhandhaka’（vol.Ⅰ　p.226）；世尊は王舎城からパータリ村に行かれた。そのときマガダの大臣・スニーダ（Sunīda）とヴァッサカーラ（Vassakāra）はヴァッジ人（Vajji）の侵攻を防ぐために城を築いていた。「アリヤの住所であり、商人の集まるところであるかぎり、パータリプッタは最高の都となり、物資の集散地となるだろう（yāvatā ariyaṃ āyatanam yāvatā vaṇippatho idaṃ agganagaraṃ bhavissati Pāṭaliputtaṃ puṭa-bhedanaṃ）」と予言された。そして世尊の出られた門はゴータマ門（Gotama-dvāra）、ガンジスを渡られた渡し場はゴータマの渡し（Gotama-tittha）と名づけられた。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.012上）；爾時世尊於竹園随宜住已、告阿難曰。汝等皆厳。当詣巴陵弗城。……世尊知時故問阿難、誰造此巴陵弗城。阿難白仏。此是禹舎大臣所造、以防禦跋祇。仏告阿難。造此城者正得天意。吾於後夜明相出時至閑静処、以天眼見諸大神天各封宅地。中下諸神亦封宅地。阿難。当知諸大神天所封宅地有人居者安楽熾盛。中神所封中人所居。下神所封下人所居功徳多少、各随所止。阿難。此処賢人所居、商賈所集、国法真実、無有欺罔。此城最勝諸方所推不可破壊。……大臣禹舎従仏後行。時作是念。今沙門瞿曇出此城門即名此門為瞿曇門。又観如来所渡河処即名此処為瞿曇河。

⑪根本有部律「薬事」（大正24　p.021下）；世尊は波吒離邑に行かれた。そこで、「世尊告曰。我在室中入定即以清浄天眼、観見於彼波吒離村大威力天神并諸小神及有威徳諸人民等、各随彼神愛楽而住。皆順天神所行教法。由諸天神於此住故、当知是城応為最勝」と予言された。そして門が「喬答摩門」、道路が「喬答摩道」と名づけられた。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.384下）；於其城邑有勝人住止、有勝人言議、有勝商人来共交易往還無滞者。謂即是此波吒離城。然有三災禍城当損壊。所謂水火及内反逆。……時行雨大臣於仏出城処為造門楼、名曰喬答摩門、河津階道名喬答摩路。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.162中）；仏従羅致聚、呼阿難去至巴隣聚。……仏問阿難。誰図此巴隣聚、起城郭者。対曰、摩竭大臣雨舎公図起此城、欲以遏絶越祇。仏言、善哉阿難。雨舎公之賢乃知図此。吾見忉利天上諸神妙天共護此地。其有土地為天上諸神所護持者其地必安且貴。又此地者天之中也。主此四分野之天。名曰仁意。仁意所護者其国久而益勝。必多聖賢智謀之人。余国不及亦無有能壊者。……公即随仏後視、仏従何城門出、欲名仏所出門為仏城門。所度小渓水名為仏渓。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.177下）；前到巴連弗止城外神樹下。……於是仏起到阿衛隩、坐一樹下。持神心道眼見上諸天、使賢神守護此地。賢者阿難従燕坐起稽首畢一面住。仏問阿難。誰

図此巴連弗起城郭者。対曰。是摩竭大臣雨舎所建、所其欲以遏絶越祇。仏言。善哉善哉。雨舎之賢、乃知図此。吾見忉利諸神妙天共持此地。其有土地為天神所護必安且貴。又此地者。近天之中主此地神、名曰人意。人意所護其国久而益勝。必多聖賢仁智豪俊余国弗及亦莫能壊、此城久久。……仏説已従坐起、出東城門。雨舎追侍曰。当名此門為瞿曇門。仏度津渚又追名之為瞿曇津。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上　p.140、Waldschmidt　p.134）；世尊はマガダ国を経て、パータリ村と王舎城の中間にある竹園の近くの王の別荘（magadheṣu janapadeṣu caryāṃ caran antarā ca pāṭaligrāmakaṃ antarā ca rājagṛhaṃ rājāgārake rātrīṃ viharati veṇuyaṣṭikāmupaniśritya*）にとどまり、そこからパータリ村に行かれた。そのときマガダの大臣・ヴァルシャーカーラ（Varṣākāra）はヴリジ人（Vṛji）の侵攻を防ぐために城を築いていた。世尊は神霊がここに住居を構えつつあるのをみて、「このパータリプトラ市は物資の集散のための最上の都となるだろう（agraṃ bhaviṣyati puṭabhedanānāṃ yad uta pāṭaliputraṃ nagaraṃ）」と予言された。そして世尊の出られた門はガウタマ門（Gautamadvāra）、ガンジスを渡られた渡し場はガウタマの渡し（Gautamatīrtha）と名づけられた。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.041中）；発於王舎城　詣巴連弗邑　到已住於彼　娑吒利支提　彼是摩竭提辺邑附庸国　国主婆羅門　多聞明経典　贍相土安危　国之仰観師　摩竭王遣使　勅告彼仰観　命起於牢城　以備於強隣　世尊記彼地　天神所保持　於中起城郭　永固不危亡　仰観心歓喜　共養仏法僧

⑫BC.（22－04）；神々がそ〔の都城〕に自らの財宝を運んでくるのをごらんになって、この都城は世の中で傑出したものとなろう、と如来（ブッダ）はおっしゃった。

［C］後世の仏伝資料

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ p.004,　赤沼　p.341）；世尊は菴婆羅致村（Ampaladaka）から那蘭陀（Nalanda）の大村に入り給うた。……巴連邑（Patalibot）に向い給うた。……このことを預告して仏陀はこの村が大きな市となって、沢山の市の中でも殊に名高くなって、閻浮提の諸国から多くの商人が群り集まるであろうと宣うた。

【63】ナーディカ村の人々への授記

ガンジス河を渡って、ナーディカ村（Nādika）に赴いた釈尊は、そこで死んだ人々の死後を記別し、「法鏡経」を説く。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.091）；世尊はガンジスを渡ってから、コーティ村（Koṭigāma）に立ち寄られ、ナーディカ（Nādika）に着かれて、レンガ堂（Giñjakāvasatha）に住された。そこでナーディカ村で死んだ人たちの死後を記別され、「法鏡経（Dhammādāsa nāma dhammapariyāya）」を説かれた。

①DN.018‘Janavasabha-s.’（闍尼沙経　vol.Ⅱ　p.200）；ある時世尊はナーディカ（Nādika）のレンガ堂（Giñjakāvasatha）に住されていた。そのとき世尊はカーシ（Kāsi）・コーサラ（Kosala）・ヴァッジ（Vajji）・マッラ（Malla）・チェーティ（Ceti）・ヴァンサ（Vaṃsa）・クル（Kuru）・パンチャーラ（Pañcāla）・マッチャ（Maccha）・スーラセーナ（Sūrasena）等の国々の信者（paricāraka）たちの死後を記別された。

①SN.055－008, 009, 010（vol.Ⅴ p.356、358）；ある時世尊はナーディカ（Nādika）のレンガ堂（Giñjakāvasatha）に住されていた。そのとき世尊はサールハ（Sāḷha）やアソーカ（Asoka）・カッカタ（Kakkaṭa）などの死後を記別した。

①Vinaya‘bhesajjakkhandhaka’（vol.Ⅰ p.230）；アンバパーリーは世尊がコーティガーマ（Koṭigāma）におられるのを聞いて、ヴェーサーリーから会いに行き、食事に招待した。ヴェーサーリーのリッチャヴィ族の人々はそれを譲ってくれと言った。しかし譲らなかった。世尊はコーティガーマに随意の間住して後、ニャーティカー（Ñātikā）村に行かれ、レンガ堂に住された。アンバパーリーは食事を供養し、菴婆婆梨園を仏を上首とせる比丘らに寄進した。それから世尊は大林・重閣講堂に住された。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.013上）；爾時世尊於拘利村随宜住已、告阿難俱詣那陀村。阿難受教即著衣持鉢、與大衆俱侍従世尊路由跋祇到那陀村、止揵椎処。……仏告阿難、伽伽羅等十二人断五下分結、命終生天、於彼即般涅槃、不復還此。五十人命終者……。仏告阿難。今当為汝説於「法鏡」使聖弟子知所生処、三悪道尽得須陀洹、不過七生、必尽苦際。亦能為他説如是事……。

②長阿含004「闍尼沙経」（大正01　p.034中）；一時。仏遊那提揵稚住処與大比丘衆千二百五十人俱。爾時……鴦伽国・摩竭国・迦尸国・居薩羅国・抜祇国・末羅国・支提国・抜沙国・居楼国・般闍羅国・頗漯波国・阿般提国・婆蹉国・蘇羅婆国・乾陀羅国・剣洴沙国、彼十六大国有命終者仏悉記之。

④雑阿含854（大正02　p.217中）；一時仏住那梨迦聚落繁耆迦精舎。爾時……仏告諸比丘。彼罽迦舎等已断五下分結得阿那含、於天上般涅槃不復還生此世。

④雑阿含1037（大正02　p.270下）；一時仏住那梨聚落曲谷精舎。爾時耶輸長者疾病困篤、如是乃至得阿那含果記。如達摩提那修多羅広説。

⑪根本有部律「薬事」（大正24　p.026中）；世尊は阿難を連れて那地迦聚落に行かれた。そこでは災疫があり、多くの人が死んだ。「仏告諸苾芻。彼淥目鄔波索迦断五下分結已、即受化生於此涅槃證不還果。於此世中得不退転法。余鄔波索迦等亦復如是」と記別され、また「法鏡経」を説かれた。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.385中）；我今欲往販葦聚落村外林中。白言。世尊、如是応去既至彼已。時彼聚落人遭疫癘。……仏言。苾芻。於此村中有二百五十諸鄔波索迦断五下分結、従此命過得化生身、於彼涅槃更不退転、證不還果不復更来。汝等苾芻。復有三百余人鄔波索迦……。我今復為汝等説「法鏡経」、応可諦聴善思念之。云何法鏡。謂仏法僧聖清浄戒……。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.163上）；仏復従拘隣聚呼阿難、俱至喜豫国。阿難言諾。仏與諸比丘俱至喜豫国揵提樹下坐。……仏言玄鳥等十人死皆在不還道中。仏告諸比丘僧、若曹但見十人死、仏持天眼見。見優婆塞死者五百人……。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.178中）；（拘利邑を経て）仏與阿難俱到喜豫邑、止河水辺揵祇樹下。……仏告諸比丘。此十人者已断自然魂神、上生十八天上到不還地、不復来下受世間法。又是国死非但此也。仏天眼見五百清信士……。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上　p.198、Waldschmidt　p.160）；世尊はガンジスを渡ってから、クティ村（Kuṭigrāma）に立ち寄られ、ナーディカー村（Nādikā）に着かれて、クンジカー休息所（Kuñjikāvasatha）に住された。そこでナーディカー村で死んだ人たちの死後を記別され、「法の鏡という名の法門（Dharmādarśa nāma dharmaparyāya）」を説かれた。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.041中）；如来復前行　至彼鳩梨村　説法多所化　復至那提村　人民多疫死

親戚悉来問　諸親疫死者　命終生何所　仏善知業報　悉随問記説

⑫BC.（22－13・14）；それから、ガンジス河の岸からブッダはクティ村へ赴かれ、そこで法話をなさった後、ナーディカー村へ赴かれた。折しもそのとき、そ〔の村〕では多くの死人が出ていた。どうして何処へだれが生まれ変わるのかを、そこで彼ら（その村の住人）に対して牟尼はお説きになった。

［C］後世の仏伝資料

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ p.007, 赤沼　p.345）；（拘利村　Kantikamaから）更に進んで那地迦（Nadika）の村に入り給うた。……「世尊は遮楼（Thamula）比丘は欲情を征服して涅槃に入り難陀（Anaunda）比丘尼は梵天界に生れて、涅槃に入り、この世界に帰らない」と宣うた。

【64】アンバパーリーの帰依

釈尊はヴェサーリー（Vesālī）の郊外のアンバーパーリ（Ambapālivana）園で娼婦・アンバパーリー（Ambapāli-gaṇikā）の食事の招待を受ける。リッチャヴィ（Licchavi）族の貴族たちは釈尊招待の権利を譲ることを要求するが、アンバパーリーは拒否する。（このとき園林を寄進したとするものもある）

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.094）；ナーディカからヴェーサーリーに着かれた世尊は、娼婦アンバパーリー（Ambapāli-gaṇikā）の食事の招待を受けられた。アンバパーリーはリッチャヴィ族の人々が食事を招待する権利を譲れとの要求を拒否し、自からの園林を仏を上首とする比丘サンガに（Buddha-pamukhassa bhikkhusaṃghassa）寄進した。

①Vinaya‘bhesajjakkhandhaka’（vol.Ⅰ　p.231）；（最後の遊行の途次に）娼婦アンバパーリー（Ambapālī gaṇikā）は釈尊を食事に招待した後、自からの園林を仏を上首とする比丘サンガに（buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa）寄進した。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.014中）；（最後の遊行の途次に）淫女菴婆婆梨は釈尊を食事に招待した後、自からの園林を仏を首とする招提僧に寄進した。

④雑阿含623（大正02　p.174上）；一時仏在跋祇人間遊行、到鞞舎離国菴羅園中住。爾時菴羅女聞世尊跋祇人間遊行至菴羅園中住、即自荘厳乗車出鞞舎離城、詣世尊所恭敬供養……。

⑥増一阿含20－11（大正02　p.596上）；（最後の遊行の途次か？）闍菴婆婆利女は釈尊を食事に招待した後、自からの園林を如来および比丘僧に寄進した。

⑦四分律「衣揵度」（大正22　p.855下）；世尊は婆闍国から遊行して毘舎離にやって来られた。その時菴婆羅婆提は自からの園林を仏および四方僧に寄進した。

⑧五分律「衣法」（大正22　p.135中）；世尊は跋耆国から遊行して毘舎離にやって来られた。その時淫女阿范和利は自からの園林を僧に寄進した。

⑪根本有部律「薬事」（大正24　p.026下）；菴没羅波利夫人は世尊が那雉迦聚落におられるのを知って、食事に招待した。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.385下）；仏告具寿阿難陀曰。我今欲往広厳城、汝可告諸大衆。時阿難陀言。如是世尊。仏及僧衆漸至城所住菴没羅林。時此城中有一女人(旧云奈女者非)顔容端正衆所知識名菴没羅。是此林主。……爾時世尊復為菴没羅女随機説法示教利喜已。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.163中）；「仏従喜豫聚呼阿難、至維耶梨国。阿難言諾。仏従喜豫聚至維耶梨国。未至七里、仏止榛園中。有婬女人字榛女。」婬女・榛女は釈尊と比丘ら

を食事に招待して受けられた。すぐ後に維耶離の豪姓諸理家がやって来て、食事を招待する権利を譲れと要求したが奈女は拒否した。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.178下）；「彼時仏請賢者阿難俱之維耶離国。即受教行。仏楽拘利歴城中去、到止城外故望女奈氏園。奈女聞仏従諸弟子自越祇来。」奈女は釈尊と比丘らを食事に招待して受けられた。すぐ後に維耶離の豪姓諸離車がやって来て、食事を招待する権利を譲れと要求したが奈女は拒否した。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上　p.225、Waldschmidt　p.172）；ナーディカーからヴァイシャーリー（Vaiśālī）に着かれた世尊は、娼婦アームラパーリー（Āmrapālī-gaṇikā）の食事の招待を受けられた。アームラパーリーはリッチャヴィ族の人々が食事を招待する権利を譲れとの要求を拒否した。

＊④雑阿含623、白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.163中）、失訳「般泥洹経」（大正01　p.178下）、⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.385下）には園林の寄進記事はない。

［B］仏伝経典

③中本（大正04　p.161中）；仏従迦維羅衛国、與千二百五十比丘俱、過拔耆国界度人民。去至維耶離、詣奈氏樹園。城中有女人、名阿凡和利。聞仏来化、歓喜無量、即便厳出、與五百女人俱。……女聞仏言、心解欲止、便発道意、自帰三尊。（明日の食事に請待し、仏受け入れる。その後、城中の長者子五百人が請待するも先請ありとして受けず。長者子は市を閉じ、城門を閉じる等の妨害をするも果たさず。）仏坐飯竟、……為説経法。五百長者子、阿凡和利、及五百女人、逮得法眼。

⑪仏讃（大正04　p.041下）；前至鞞舎離　住於菴羅林　彼菴摩羅女　承仏詣其園　……　彼菴摩羅女　漸至世尊前　見仏坐樹下　禅定静思惟　念仏大悲心　哀受我樹林　……　爾時鞞舎離　諸離車長者　聞世尊入国　住菴摩羅園　有乗素車輿　素蓋素衣服　青赤黄緑色　其衆各異儀　導従翼前後　争塗競路前　天冠袞花服　宝飾以荘厳　威容盛明曜　増暉彼園林　除捨五威儀　下車而歩進　息慢而形恭　頂禮於仏足　……　請仏及大衆　明日設薄供　仏告諸離車　菴摩羅已請　離車懐感愧　彼何奪我利　知仏心平等　而起随喜心

⑫BC.（22－15）；そこ（ナーディカー村）に一夜を過ごされた後、〔ブッダは〕ヴァイシャーリーの都へ赴かれた。それから、アームラパーリーの土地である吉祥なる園林へと誉れのかたまりなるひと（ブッダ）は赴かれた。女性の第一人者アームラパーリーは、導師（ブッダ）がそこに〔来られたのを〕耳にして、最高の馬をしつらえた馬車に乗って喜びいさんでやって来た。……如来の法話によって〔彼女は〕欲望の本性を持つ心を捨て、女であることを蔑み、〔感官の〕対象に背を向け、自らの生業を不浄のものと考えたのである。

⑬行経（大正04　p.091上）；仏與弟子衆　乃至捺女林　榛女聞之已　馳出往見仏　……　如是禮仏足　……　前白世尊言　……　明旦受我請　……　黙然受其請　……　厭悪女人形　懐慚且還帰　時仏許奈女　受請去之後　維耶離貴賤　皆来至仏所　……　是輩亦請仏　仏言已受請　仏許奈女請　是輩皆懐恨　時仏為是等　広説微妙法

［C］後世の仏伝資料

⑥Bigandet.（vol.II　p.007，赤沼　p.345）；時に吠舎羅（Wethalie）国に菴婆波利（Apopalika）と称する名高き娼婦があった。菴婆波利は、檬樹の繁れる大きな快しい森に近い美しい場処に住うていた。……教えをきいて大に感動して、世尊と御弟子達とを翌日自第に招待……（王子達の招待を斥ける。）……菴婆波利はこの林を世尊に献上し……。

【65】竹林村で最後の雨安居を過ごす

釈尊はヴェーサーリーの近郊の竹林村（Veluvagāmaka）で最後の雨安居に入り、８０歳となり、老い衰えたと慨嘆される。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.098）；世尊はアンバパーリー園から竹林村（Veluvagāmaka）に移られ、そこで雨安居を過ごされた。そのとき病にかかられて、自分は年老い８０歳となった（ahaṃ kho pana etarahi jiṇṇo vuddho mahallako addha-gato vayo anuppatto, asītiko me vayo vattati）と慨嘆された。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.014下）；爾時世尊於毘舎離、随宜住已。告阿難言。汝等皆厳。吾欲詣竹林叢。対曰。唯然。即厳衣鉢與大衆侍従世尊、路由跋祇至彼竹林。……此土飢饉、乞求難得。汝等宜各分部、随所知識、詣毘舎離及越祇国於彼安居、可以無乏。吾独與阿難於此安居。……吾已老矣年粗八十。譬如故車方便修治得有所至、吾身亦然。以方便力得少留寿。

⑪根本有部律「波羅市迦004」（大正23　p.675中）；爾時世尊未入涅槃安住於世與諸弟子二時大集。一謂五月十五日欲安居時。二謂八月十五日随意了時。若前安居者受教勅已往詣城邑村坊聚落。而作安居至随意了皆来集会。随所證獲皆悉白知、其未證者請求證法。近薜舎離安居苾芻三月既満作衣已竟。顔色憔悴形容羸瘦執持衣鉢往竹林村。

⑪根本有部律「薬事」（大正24　p.029下）；爾時世尊告阿難陀。汝可随我往竹林聚落。答曰。唯然世尊。爾時世尊遊行薜利支人間至竹林聚落北、昇摂波樹林中住。于時其国飢饉。極至困弊。乞食難得。爾時世尊告諸苾芻。時世飢倹、乞食難得。汝諸苾芻。如飢倹経広説、亦如道品伝来経、六集経及大涅槃経等法行。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.387上）；我今欲往竹林中汝可告諸大衆。時阿難陀如仏所教即與大衆随仏至竹林北住升摂波林。時属飢倹乞求難得。仏告諸苾芻。今時飢倹、汝等宜可求同意者於薜舎離諸方聚落随便安居、我與阿難陀於此処住。……我今衰邁身力羸弱年将八十、唯依二事而得存住、如朽破車亦依二事。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.164中）；仏従維耶梨国出、告阿難。寧可俱至竹芳聚。阿難言諾。又聞竹芳聚米穀大貴、諸比丘求分衛難得。仏坐思惟。維耶梨国飢饉穀糴騰貴。其聚狭小、不能供諸比丘分衛……。今我身皆痛、我持仏威神、治病不復。持心思病如小差状。仏語阿難。今仏年已尊、且八十。如故車無堅強、我身體如此無堅強。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.180上）；仏請賢者阿難俱至竹芳邑、止城北林樹下。是歳竹芳邑飢饉穀糴騰貴。仏告諸比丘。是間飢饉、乞求難得。汝等宜分部行、別到維耶及越祇諸隩邑、可以無乏。……我亦已老、年且八十。形如故車無牢無強。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上　p.285、Waldschmidt　p.192）；世尊はアームラパーリー園から竹林村（Veṇugrāma）に移られ、そこで雨安居を過ごされた。そのとき病にかかられて、自分は年老い８０歳となった（tathāgato vṛddho jīrṇatāṃ prāpto 'śītike vayasi vartate）と慨嘆された。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.43下）；往詣毘紐村　於彼夏安居　三月安居竟　復還鞞舎離

⑫BC.（23－62・63）；その夜が過ぎて、〔翌朝〕アームラパーリーは〔世尊たちを〕尊敬してもてなした。〔それから、世尊は〕ヴェーヌ村（竹林村）へ赴かれ、〔夏安居（雨期の三ヶ月の修行）をそこで過ごされた〕。〔三カ月の〕夏安居を過ごされて、ヴァイシャーリーへ行かれ、猿沢の池の岸に大牟尼（ブッダ）はとどまられた。

［C］後世の仏伝資料

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ p.008, 赤沼 p.346）；この場所に暫らく留まり給うた後、世尊は竹芳（Weluwa）の村にいたり、第四十五の最後の雨期を過ごし給うた。……「……私は今や非常に老いた。八十になった。……我が弟子は、我が教法の続く限り自らに頼り、法に帰依せねばならぬ。……」

【66】入滅を決心する

悪魔波旬が早く入滅せよと迫り、釈尊は３ヶ月後に般涅槃することを決心する。阿難に自帰依、法帰依を説き、重閣講堂に比丘らを集めさせて入滅することを宣言する。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ p.102）；世尊はヴェーサーリーのチャーパーラ廟（Cāpāla cetiya）において、悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する（ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati）」と宣言された。そして阿難にもこれを伝え、ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて「諸行は壊れるものである。不放逸によって精進せよ（vaya-dhammā saṅkhārā, appamādena sampādetha）」と説法され、比丘らにも３ヶ月後に涅槃に入ることを宣言された。

①SN.51－10（vol.Ⅴ p.262）；世尊は悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する（ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati）」と宣言された。

①AN.08－70（vol.Ⅳ p.311）；世尊は悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する（ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati）」と宣言された。

①‘Udāna’06－01（p.064）；世尊は悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する（ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati）」と宣言された。

②長阿含002「遊行経」（大正01 p.015中）；「仏告阿難、俱至遮婆羅塔。対曰。唯然。如来即起著衣持鉢詣一樹下。告阿難。敷座。吾患背痛、欲於此止。」……「止、止、波旬、仏自知時不久住也。是後三月、於本生処拘尸那竭娑羅園双樹間、当取滅度。」そして講堂に比丘らを集めさせて、「如来不久、是後三月当般泥洹」と宣言された。

③中阿含036「未曾有経」（大正01 p.477下）；若如来不久過三月已当般涅槃。由是之故令地大動。地大動時四面大風起、四方彗星出、屋舎牆壁皆崩壊尽。是謂第三因縁令地大動。

⑥増一阿含51－01（大正02 p.821中）；爾時大愛道聞諸比丘説如来不久当取滅度不過三月当在拘夷那竭娑羅双樹間。

⑩僧祇律「雑誦跋渠」（大正22 p.489下）；爾時阿闍世王韋提希子與毘舎離有怨如大泥洹経中広説。乃至世尊在毘舎離於放弓杖塔辺捨寿、向拘尸那城熙連禅河側力士生地堅固林中双樹間般泥洹。於天冠塔辺闍維乃至諸天使火不然。待尊者大迦葉故。

⑪根本有部律「薬事」（大正24 p.031中）；爾時世尊告具寿阿難陀曰。我今與汝往拘尸那城。答言。唯然。既漸次行於其中路有梵婆城、不入此城。便即往彼拘尸那国。到彼国已。爾時世尊指娑羅双樹。告阿難曰。我当不久於彼林下入般涅槃。

⑪根本有部律「雑事」（大正24 p.387中）；是故当知。於我現在及我滅後、汝等自為洲渚自為帰依、法為洲渚法為帰依、無別洲渚無別帰依。……時阿難陀聞仏教已、即随仏後至広厳城住重閣堂。於小食時著衣持鉢入城乞食。時阿難陀随仏而去、次第乞已還至本処。飯食訖収衣鉢澡漱畢洗足已。仏即往詣取弓制底樹下而坐、告阿難陀曰。此広厳城物産華麗芳林果樹在処敷榮。塔廟清池甚可愛

楽。贍部洲内此最希奇。……仏告魔曰。汝且少待、如来不久却後三月入無余依大涅槃界。……汝今可往取弓塔辺側近苾芻皆令普集常食堂中。時阿難陀即往遍告、衆既集已。……仏従座起至其堂内就座而坐告諸苾芻。汝等観察、諸行無常、是変易法、不可委信、深可厭捨而求解脱……。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.164下）；仏従竹芳聚、呼阿難。且復還至維耶梨国。阿難言受教。仏還維耶梨国入城持鉢行分衞。還止急疾神樹下露坐。……阿難即起、語諸比丘僧、仏却後三月当般泥洹。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.180中）；仏請賢者阿難俱至維耶離。受教即行、既到止猨猴館。……魔曰、可足時已畢矣。仏言汝黙、如来不久、是後三月当取泥洹。……仏告諸比丘。世間無常、無有牢固、皆当離散。……仏後三月、当般泥洹、勿怪勿憂。……彼時仏勅賢者阿難請維耶離国猗行比丘。受教即請。悉曾講堂、稽首畢一面住。仏告諸比丘。世間無常無有牢固、皆当離散。無常在者心識所行但為自欺。恩愛合会其誰得久。天地須彌尚有崩壊。況于人物。而欲長存生死憂苦。可厭已矣。仏後三月当般泥洹、勿怪勿憂。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.191中）；吾今当往遮波羅支提入定思惟。作此言已。即與阿難俱往彼処既至彼処。……却後三月当般涅槃。是時魔王、聞仏此語、歓喜踊躍還帰天宮。……爾時世尊告阿難言。汝今可語此大林中重閣講堂。諸比丘衆皆悉令往大集講堂。阿難奉勅。……比丘、一切諸法皆悉無常、身命危脆猶如驚電。汝等不応生於放逸。汝等当知、如来不久、却後三月、当般涅槃。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上　p.298、Waldschmidt　p.202）；世尊はヴァイシャーリーのチャーパーラ霊樹（Cāpāla caitya）において、悪魔・悪しき者に「今や久しからずして、三ヶ月後に般涅槃する（na cirasyedānīṃ tathāgatasya trayāṇāṃ māsānām atyayād anupadhiśeṣe nirvāṇadhātau parinirvāṇaṃ bhaviṣyai）」と宣言された。そして阿難にもこれを伝え、ヴァイシャーリーの会堂（upasthāna-sālā）に比丘らを集めて「一切の作られたものは無常であり、諸の法を受持し、完成し、保ち、理解し、説くことになさい」と説法された。

［B］仏伝経典

⑨僧伽（大正04　p.142下）；世尊亦捨寿命。……是時尊者阿難、清旦従座起、往詣世尊所。……阿難白仏言、今日世尊亦捨寿命耶。世尊報曰、如是阿難、我亦捨寿命。

⑪仏讃（大正04　p.043下）；往詣毘紐村　於彼夏安居　三月安居竟　復還鞞舎離　……　以感魔波旬　来詣於仏所　合掌勧請言　昔尼連禅側　……　今所作已作　当遂於本心　時仏告波旬　滅度時不遠　却後三月満　当入於涅槃

⑫BC.（23－64）；マーラ（魔）がその森に現れて、近づいて来て言った。（ナイランジャナー河の岸での以前のやり取り）それから、以上の〔マーラの〕言葉をお聞きになって、「三ヶ月経てば涅槃に入ろう。おどおど心配するな」と阿羅漢たちの最高者（ブッダ）はおっしゃった。

⑬行経（大正04　p.095下）；欲界塵労王　厥号名弊魔　率来至仏所　便説是言辞　維仏往昔坐　尼連禅水辺　……　時仏天中天　梵音告魔王　今魔当懐喜　必無復憂患　今却後不久　三月当捨寿

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.054下）；爾時世尊於忉利天……至三月尽将欲還下、命鳩摩羅。汝今可下至閻浮提語言、如来不久当入涅槃。

③氏譜（大正50　p.093下）；長阿含云。仏在毘舎離與阿難独居。後夏挙体皆痛、告阿難。……阿難為魔所蔽不悟仏意。魔請仏言願入涅槃、乃至三請告言。是後三月於本生処、拘尸那竭婆羅園双樹間当取滅度。

④統紀（大正49　p.163中）；五十二年(辛未)　冬十一月既望。仏在毘舎離国大林精舎重閣講堂、告諸比丘。却後三月我当般涅槃。

⑤JM.（p.035，畑中　p.152）；マーガ星宿に満月が宿るマーガ月の満月の日に（Maghapuṇṇamiyaṃ Māghanakkhattena）「今から３ヶ月後に如来は般涅槃するであろう」とパーヴァーラ・チェーティヤ（Pāvāla-cetiya）にいる時に知り、寿行を放棄したのであった。

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ p.031，赤沼　p.373）；阿難よ、私が仏陀となって間もなく、尼連禅河の岸の優留毘羅の幽居にあった時、悪魔が私の前に顯れて涅槃に入れとすすめた事がある。……処が今遮和羅の祠近く悪魔は再び顯れて、私に向い同じいことを願うた。「悪魔よ、心配するな、今より三月後には涅槃に入るであろう」と私は彼に曰った。

【67】ボーガ城における説法

ヴェーサーリーからボーガ城（Bhoganagara）に到着した釈尊は、比丘らに四大教法を説く。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.122）；世尊はヴェーサーリーから、バンダ村（Bhaṇḍagāma）・ハッティ村（Hatthigāma）・アンバ村（Ambagāma）・ジャンブ村（Jambugāma）を経由してボーガ城（Bhoganagara）に着かれ、アーナンダ廟（Ānanda cetiya）に住された。ここで世尊は比丘たちに４大教法（cattāro mahāpadesā）を説かれた。

①AN.04－180（vol.Ⅱ　p.167）；世尊はボーガ城のアーナンダ廟に住されていた。そのとき４大教法（cattāro mahāpadesā）を説かれた。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.017中）；爾時世尊於菴婆羅村随宜住已、仏告阿難。汝等皆厳、当詣瞻婆村・揵茶村・婆梨婆村及詣負彌城。対曰。唯然。即厳衣鉢與諸大衆侍従世尊、路由跋祇漸至他城於負彌城北止尸舎婆林。仏告諸比丘。当與汝等説四大教法、諦聴、諦聴、善思念之……。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.389上）；如是次第経過十余聚落皆為衆生随機説法。至受用城北林而住。于時大地悉皆振動、四維上下煙焔洞然、日月無光流星堕落。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.164下）；世尊は維耶梨国から華氏郷土を経て、夫延城に着かれた。城北の樹下に坐され、比丘たちに４大教法を説かれた。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.182下）；善浄邑にて比丘らに法句経を説かれた。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.195中）；世尊は毘耶離から象村・菴婆羅村・閻浮村をへて善伽城に着かれた。その時世尊は４決定説を説かれた。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上　p366、Waldschmidt　p.228）；世尊はヴァイシャーリーからクシタ村（Kuṣṭhagrāmaka）、ガンダ村（Gaṇḍagrāmaka）、ドローナ村（Droṇagrāmaka）、シュールパ村（Śūrpagrāmaka）、アームラ村（Āmragrāmaka）、ジャンブ村（Jambugrāmaka）、ハスティ村（Hastigrāmaka）を経てボーガ市（Bhoganagaraka）に到着し、理法（dharma）と戒律（vinaya）について説法された。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.045下）；是吾之最後　遊此鞞舎離　往力士生地　当入於涅槃　漸次第遊行　至彼蒲加城　安住堅固林　教誡諸比丘　吾今以中夜　当入於涅槃　……

⑫BC.（25－36～40）；それから、順次、導師（ブッダ）はボーガ市へ赴かれ、そこにとどまられた一切知者（ブッダ）は、比丘たちにおっしゃられた。「今しも私が逝った後は、教え（法）を最高のものとして依れ。それ（教え）こそが汝〔ら〕の最高目的である。それ以外のものは徒労

である。経典の中にも入っておらず、戒律の中にもあらわれていないものは、〔私の〕論理と個個に矛盾する。それを決して保持してはならない。それは教え（法）ではなく、律ではなく、私の言葉ではない。多くの人の言葉であったとしても、その暗黒の教えは捨てられるべきである。清浄な教えは保持されるべきであり、そこにおいて顛倒のあることのない、それこそが教え（法）であり、律である。それこそが私の言葉である。

⑬行経（大正04　p.103上）；仏以入無為　滅身諸苦痛　與無著弟子　出妙維耶離　行歴諸村落　安詳以次第　覚悟衆生類　顯露宿善行　度脱無央数　令服甘露味　次至成有城　力士所生土　與諸弟子俱　止宿其土界

［C］後世の仏伝資料

⑥Bigandet.（vol. II　p.035,　赤沼　p.378）；仏陀はブハンダ・ガーマ（Pantoogama）に着き給うた。つづいて、ハツトヒ（Hatti）、ジャムブゥ（Tsampou）、アンバ（Appara）の村々を過りて、負伽（Bauga）の市に入り給うた。この市に於て、四大教法を説き給うた。

【68】チュンダの供養

ボーガ城からパーヴァー（Pāvā）に到着した釈尊は、鍛冶工のチュンダ（Cunda）が供養したスーカラ・マッダヴァ（sūkaramaddava）を食し、激しい腹痛に襲われる。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol. II　p.098）；世尊はボーガ城からパーヴァー（Pāvā）に至られ、鍛冶屋の子であるチュンダ（Cunda）のアンバ園（ambavana）に住された。そこでチュンダの供養したスーカラマッダヴァ（sūkaramaddava）を食され、死に近き病気（ābādha māraṇantika）にかかられた。

①‘Udāna’08－05（p.081）；世尊はマッラ国（Malla）に遊行し、パーヴァー（Pāvā）に至られ、チュンダ（Cunda）のアンバ園（ambavana）に住された。そこでチュンダの供養したスーカラマッダヴァを食され、死に近き病気にかかられた。

①‘Suttanipāta’Vs.083～090（p.016）；世尊はチュンダに４種の沙門（caturo samaṇā）について説かれた。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.018上）；爾時世尊於負彌城随宜住已、告賢者阿難、俱詣波婆城。対曰。唯然。即厳衣鉢與諸大衆侍従世尊、路由末羅至波婆城闍頭園中。時有工師子名曰周那……。爾時周那取一小座於仏前坐、漸為説法、示教利喜已。大衆囲遶侍従而還。中路止一樹下、告阿難言。吾患背痛、汝可敷座……。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.389上）；（広厳城－重患村－十余聚落－城北林－）我今欲往波波聚落（波波此云罪悪）。答曰。如是世尊是時欲往倶尸那城壮士生地漸至波波邑。依折鹿迦林而住。……時此衆中有鍛師之子名曰准陀。亦坐聴法……。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.167下）；仏與比丘僧従夫延国至波旬国、止禅頭国中。波旬国人民名諸華。諸華人民聞仏来止禅頭国中。皆来出前、為仏作禮皆却坐。仏皆為説経。時有一人名淳。淳父字華氏。華氏子時在坐中……。仏去淳家呼阿難、去至鳩夷那竭国。阿難言諾。即與比丘僧従華氏国至鳩夷那竭国。仏道得病、下道止坐。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.180中）；世尊は維耶から拘利邑・健持邑・掩満邑・出金邑・授手邑・華氏邑・善浄邑を経て波旬国に行き、夫延歴城外の禅頭園中にとどまられた。その時波旬の豪姓の諸華氏が世尊に会いにやって来たが、その中の淳の食事の招待を受けられた後、病気に

なられた。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.196下）；世尊は善伽城から鳩娑村を経て波波城に着かれた。城中に工巧子あって淳陀と名づけるものがいた。食後鳩尸那城に行かれる途中大苦痛を生じられた。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上　p400、Waldschmidt　p.252）；世尊はマッラ族の村（Malla）に遊行し、パーパー村（Pāpāgrāmaka）に至られ、鍛治工のチュンダ（Cunda karmāraputra）の供養した食を食され、病気にかかられた。

＊①‘Suttanipāta’Vs.083～090；Cundasuttaと呼ばれるこの経は、このときの釈尊の説法であると考えられている。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.046中）；時有長者子　其名曰純陀　請仏至其舎　供設最後飯

⑫BC.（25－51）；それから彼（ブッダ）を敬う善者チュンダの家において、世尊は食事をなさった。彼（チュンダ）のために［そうなさったの］であって、ブッダ自身のためにではない。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.070上））；爾時会中有優婆塞、是拘尸城工巧之子、名曰純陀……白仏言。唯願世尊、及比丘僧、哀受我等、最後供養。

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ　p.035,　赤沼　p.378）；率いて波波（Pawa）城に赴き、富裕なる鍛工の子淳陀（Tsonda）の建立した檬樹林の精舎に入り給うた。……世尊は自ら小豚の肉と米とを取りて食し給い……。

【69】スバッダの帰仏

スバッダ（Subhadda）がクシナーラー（Kusinārā）の沙羅双樹の間に臥す釈尊を訪ね、最後の弟子となる。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.153）；クシナーラー（Kusinārā）の沙羅双樹の間で（antarena yamakasālānaṃ）、世尊は阿難に命じてスバッダ（Subhadda）を出家させた。スバッダはもう一人の阿羅漢となった（Aññataro kho pan' āyasmā Subhaddo arahantaṃ ahosi）。彼が世尊の最後の直弟子であった（So Bhagavato pacchimo sakkhi-sāvako ahosi）。

①‘Apadāna’03－05－049（p.100）；（スバッダのアパダーナ）サーラの森の最後の床に（pacchime sayane）向かわれた聖者は、私を出家させたもうた（pabbājesi）。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.025上）；是時、拘尸城内、有一梵志。名曰須跋、年百二十耆旧多智。……於是須跋即於其夜、出家受戒、浄修梵行、於現法中自身作證、生死已尽、梵行已立、所作已辦、得如実智、更不受有。時夜未久即成羅漢。是為如来最後弟子。

④雑阿含979（大正02　p.254上）；時倶夷那竭国有須跋陀羅外道出家、百二十歳年耆根熟。……時尊者須跋陀羅得阿羅漢、解脱楽覚知已作是念。我不忍見仏般涅槃、我当先般涅槃。時尊者須跋陀羅先般涅槃已。然後世尊般涅槃。

⑤別訳雑阿含110（大正02　p.413上）；一時仏在拘尸那竭力士生地娑羅林中。爾時如来涅盤時到告

阿難曰。汝可為我於双樹間北首敷座。於時阿難受仏勅已於双樹間北首敷座。既敷座已還至仏所、頂禮仏足在一面坐。白仏言。世尊。我於双樹間北首敷座所作已竟。爾時世尊即従坐起往趣双樹敷上北首右脇而臥足足相累、繫心在明、起於念覚先作涅盤想。爾時拘尸那竭国有一梵志。名須跋陀羅。先住彼国其年朽邁一百二十……。

⑥増一阿含04－10（大正02　p.558下）；最後取證得漏尽通、所謂須抜比丘是。

⑥増一阿含42－03（大正02　p.752上）；爾時須抜梵志従彼国来至拘尸那竭国遙見五百人来。即問之曰。汝等為従何来。五百人報曰。須抜当知如来今日当取滅度在双樹間。是時須抜便作是念……。爾時世尊告阿難曰。我最後弟子之中所謂須抜是也。爾時須抜白仏言。我今聞世尊夜半当取般涅槃。唯願世尊先聴我取涅槃。我不堪見如来先取滅度。爾時世尊黙然可之。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.396上）；爾時拘尸那城有出家外道、名曰善賢(梵云蘇跋陀羅)年百二十形容衰朽。……爾時善賢起徹到心、即便速證阿羅漢果、得心解脱。復作是念、我今不忍見仏般涅槃宜可先去。作是念已詣世尊所、頂禮双足退坐一面白仏言。大徳世尊、我願先入涅槃……。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.171下）；王去仏五里、所止屯住。国有耆年、字曰須抜、年百二十。……願仏加哀、受我為沙門。須抜髪自然堕地、袈裟著體。精心思教。霍然無想、一心清浄、喩明月珠、即得応真道。重自思念。吾不能使吾師於前泥洹也。即時先仏、取泥洹道。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.187中）；是時城中、有老異学、年百二十、名曰須跋。……賢者須跋已度世得応真。坐自念。吾不能待仏般泥洹、便先滅度、而仏後焉。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.203中）；爾時鳩尸那城、有一外道。年百二十、名須跋陀羅。……於是世尊即便喚之、善来比丘。鬚髪自落、袈裟著身、即成沙門。世尊又為広説四諦。即獲漏尽、成阿羅漢。爾時世尊告阿難言。汝今当知、我於道場成阿耨多羅三藐三菩提、最初説法、度阿若憍陳如等五人。今日在於娑羅林中、臨般涅槃、最後説法、度須跋陀羅。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・下　p.632、Waldschmidt　p.366）；クシナガリー（Kuśi-nagarī）のシャーラの双樹の間で（antareṇa yamakaśālayor）、世尊は「来れ、修行者よ、清浄行を行え（ehi bhikṣo cara brahmacaryam）」といって、出家させた。スバドラはよく解脱した阿羅漢となった（arhan babhūva suvimuktaḥ）。

＊⑤別訳雑阿含213（大正02　p.453中）；須跋陀羅者如集偈頌中説。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.046中）；飯食説法畢　行詣鳩夷城　度於蕨蕨河　及熙連二河　彼有堅固林　安隠閑静処　入金河洗浴　身若真金山　告勅阿難陀　於彼双樹間　掃灑令清浄　安置於繩床　吾今中夜時　当入於涅槃　……　爾時有梵志　名須跋陀羅　賢徳悉備足　浄戒護衆生　少稟於邪見　修外道出家（仏入滅近きを知り、阿難に面会を願うも、阿難はこれを断ろうとするが、仏はこれを許される）……　心開信増広　仰瞻如来臥　不忍観如来　捨世般涅槃　及仏未究竟　我当先滅度　合掌禮聖顔　一面正基坐　捨寿入涅槃　如雨滅小火　仏告諸比丘　我最後弟子

⑫BC.（26－01）；それから善行を正しくそなえ、〔身・口・意〕三種の戒を保ち、生きものたちについて犠牲祭を行なわないスバドラは、善逝（ブッダ）にお目にかかりたく思い、比丘として解脱したいと思い、喜びを与える人たるアーナンダに言った。牟尼（ブッダ）が涅槃（入滅）される時だということを私は聞きました。そのために私はお目にかかりたいという思いが生じました。……そこで……アーナンダは「〔今はその〕時ではない」と、涙顔で答えた。……（ブッダ）は、それをお知りになって、「私は世間の人々を利益するために生まれてきたのであるから、そのバラモンを妨げてはいけない」とおっしゃった。……多くの弟子をお持ちになっている大聖仙（ブッダ）の〔最後の〕弟子となったのである。

⑬行経（大正04　p.106中）；時賢善須跋　修仁除躁性　欲見仏求度　来謂阿難言　我覚天人師

時至欲滅度　故来詣難見　覚知一切法　請阿難通入　阿難心煩毒　便謂須跋言　今非見師時　……　告語阿難言　莫違来現者　吾出世為善　……　時須跋聞之　尋即得解脱

［C］後世の仏伝資料

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ　p.061，　赤沼　p.400）；倶尸那羅（Koutheinaron）の市に、外道に使えて居る人があった。……須跋陀（Thoubat）といい、……彼は仏陀の市の近くにあって涅槃に入り給わんとするをきき、世尊に見え奉って疑を除きたいと思うた。（阿難は取次を拒否するも世尊はこれを許す）仏陀は阿難を呼び、須跋陀を一比丘たらしむるように命じ給うた。……彼は仏陀の……最後に教化し給うた入道者であった。

【70】最後の説法

釈尊は弟子たちに、「諸行は滅するものである。不放逸に精進せよ」と最後の説法をする。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.156）；世尊は比丘らに言われた。「比丘らよ、あなた達に告げる。諸行は滅するものである。不放逸に精進せよ（handa dāni bhikkhave āmantayāmi vo; vayadhammā saṃkhārā, appamādena sampādetha）」と。これが如来の最後の言葉であった（Ayaṃ Tathāgatassa pacchimā vācā）。

①SN.06－15（vol.Ⅰ　p.157）；世尊はクシナーラーのマッラ族のウパヴァッタナの沙羅樹園の沙羅双樹の間で般涅槃されるとき（Kusinārāyaṃ viharati Upavattane Mallānaṃ sālavane antarena yamakasālānaṃ parinibbānasamaye）、比丘らに最後の説法をされた。「不放逸に励め、諸行は滅するものである（appamādena sampādetha vayadhammā sankhārā）」と。

①AN.04－76（vol.Ⅱ　p.079）；世尊はクシナーラーのマッラ族のウパヴァッタナの沙羅樹園の沙羅双樹の間で般涅槃されるとき、仏法僧において疑惑があるなら問え、後で師は現存せず、問うことができないと後悔することなかれ（pucchatha, bhikkhave mā pacchā vippaṭisārino ahuvattha, sammukhībhūto no satthā ahosi nāsakkhimha bhagavantaṃ sammukhā paṭipucchituṃ）」と語られた。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.026中）；比丘、無為放逸。我以不放逸故自致正覚。無量衆善亦由不放逸得。一切萬物無常存者。此是如来末後所説。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.399中）；仏言、法皆如是諸行無常。是我最後之所教誨。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.188中）；仏語阿難。其已願楽如来正化、於仏法衆苦習尽道。無所疑者当棄貪欲慢悋之心。遵承仏教以精進受、黙惟道行。是為最後仏之遺令。必共順之。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.204下）；汝等当知。一切諸行皆悉無常。我今雖是金剛之體亦復不免無常所遷。生死之中極為可畏。汝等宜応勤行精進、速求離此生死火坑。此則是我最後教也。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・下　p.664、Waldschmidt　p.386）；世尊は「さあ、修行僧たちよ。沈黙しておれ。もろもろの事象は過ぎ去るものである（aṅga bhikṣavas tūṣṇīṃ bhavata vyayadharmāḥ sarvasaṃskārāḥ）」と説かれた。これが人格完成者の最後の言葉であった（iyaṃ tatra tathāgatasya paścimā vācā）。

［B］仏伝経典

⑨僧伽（大正04　p.143下）；無常為所従生……我等今日当修何業。今世尊最後説此法。

⑪仏讃（大正04　p.049下）；汝等善自護　勿生於放逸　有者悉帰滅　我今入涅槃　言語従是断

此則最後教

⑫BC.（26－88）；動物・静物のすべては滅する。それゆえ、汝らはよく注意深く（不放逸）あれ。〔私が〕涅槃すべき時がやってきた。汝ら、言うことなかれ。これが私の最後の言葉である。

［C］後世の仏伝資料

③氏譜（大正50　p.094上）；双巻泥洹云。告諸比丘。……我為聖師至七十九、……無宜放逸善法由生、萬物無常此是後説。

④統紀（大正49　p.166下）；世尊将入涅槃。是時中夜寂然無声、為諸弟子略説法要。汝等比丘於我滅後当尊重珍敬波羅提木叉、……是汝大師。

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ p.068，赤沼　p.406）；「愛する比丘等よ、生あるものはすぐにその裏に滅びるということを含むものである。このことを忘るなよ。……」これは仏陀の最後の御語であった。

【71】涅槃

釈尊は禅定を順次に楽しみ、最後に第四禅に入って入滅する(1)。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.156）；世尊は……初禅から第２禅、第３禅、第４禅に入られ、第４禅から立たれて直後に般涅槃された（catutthajhānā vuṭṭhahitvā samanantarā parinibbāyi）。

①DN.017‘Mahāsudassana-s.’（vol.Ⅱ　p.169）；世尊はクシナーラーの沙羅双樹の間に住され、この地で入滅する因縁を語られた。

①SN.06－15（vol.Ⅰ　p.158）；世尊は……初禅から第２禅、第３禅、第４禅に入られ、第４禅から立たれて直後に般涅槃された（Catutthajhānā vuṭṭhahitvā samanantarā parinibbāyi）。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.026下）；世尊……入第一禅、従第一禅起、入第二禅、従二禅起、入第三禅、従三禅起、入第四禅、従四禅起、仏般涅槃。

③中阿含033「侍者経」（大正01　p.474上）；一時世尊遊拘尸那竭住恕跋單力士娑羅林中。爾時世尊最後欲取般涅槃時告曰。阿難、汝往至双娑羅樹間可為如来北首敷床。如来中夜当般涅槃……。

③中阿含068「大善見王経」（大正01　p.515中）；一時仏遊拘尸城住恕跋單力士娑羅林中。爾時世尊最後欲取般涅槃時告曰。阿難、汝往至双娑羅樹間可為如来北首敷床、如来中夜当般涅槃……。

④雑阿含604（大正02　p.167下）；此処如来具足作仏事畢、於無余般涅槃而般涅槃。

④雑阿含1197（大正02　p.325中）；世尊往就繩床右脇著地北首而臥、足足相累、繫念明相。爾時世尊即於中夜於無余涅槃而般涅槃般涅槃已。双堅固樹尋即生花周匝垂下供養世尊。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.399中）；……従初禅出還入第二第三第四静慮、寂然不動便入無余妙涅槃界。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.172下）；年亦自至七十有九、惟断生死迴流之淵、思惟深観、従四天王、上至不想入、従不想転還身中、自惟身中四大悪露、無一可珍。北首枕手猗右脇臥、屈膝累脚、便般泥曰。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.188下）；……従一禅思復至三禅、便従四禅反於無知棄所受余泥洹之情、便般泥洹。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.199下）；常在人天受楽果報無有窮尽。何等為四。一者如来為菩薩時、在迦比羅旆兜国藍毘尼園所生之処。二者於摩竭提国、我初坐於菩提樹下得成阿耨多羅

三藐三菩提処。三者波羅榇国鹿野苑中仙人所住転法輪処。四者鳩尸那国力士生地熙連河側娑羅林中双樹之間般涅槃処。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.205上）；乃至次第入於初禅。復出初禅、入第二禅。出於二禅、入第三禅。出於三禅、入第四禅。即於此地入般涅槃。

⑫法賢訳「阿羅漢具徳経」（大正02　p.833上）；声聞能修浄行最後出家、須跋陀羅苾芻是。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・下　p.690、Waldschmidt　p.394）；世尊は……初禅から第２禅、第３禅、第４禅に入られ、第４禅を達成されてから、（清らかな）眼を獲得して、不動なる寂静に入り、ブッダなる尊師は完きニルヴァーナに入られた（caturthaṃ dhyānaṃ samāpyacakṣuṣmān āniñjyaṃ śāntiṃ samāpanno buddho bhagavān parinirvṛtaḥ）。

［B］仏伝経典

⑨僧伽（大正04　p.143下）；是時世尊臨欲般涅槃時、告諸比丘。汝等比丘、有所狐疑、便可時問。乃至一切行無浄常云何。尊者阿那律。世尊般涅槃耶。

⑪仏讃（大正04　p.049下）；（初禅→九正受→初禅→四禅）出定心無寄　便入於涅槃

⑫BC.（26－89）；（初禅→九種類の定→初禅→四禅）そして四禅の行から彼（ブッダ）は出られると、そのままただちに寂静へとお入りになったのである。

⑬行経（大正04　p.108下）；吾入泥洹城　時今已近到　於是捨寿行　是我未後言（第一禅→四禅→往返於九禅→還至第一禅→四禅）然後捨寿行　庵入泥洹城　仏適捨寿行

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.068上）；釈迦双樹般涅槃記。（出大般涅槃経）

①釈迦（大正50　p.072上）；自我為聖師至七十九、所応作者亦已究暢。

②歴代（大正49　p.025）；(壬子)四(仏年七十九以匡王四年二月十五日後夜、於中天竺拘尸那城力士生地娑羅樹間入涅槃)

③氏譜（大正50　p.093下）；仏入城向双樹間、令阿難敷座、使足南首北面向西方。……我今成正覚已於此処復捨身命涅槃。（初禅→非想定→初禅→四禅）。従定起已入般涅槃。

④統紀（大正49　p.166下）；時世尊……右脇而臥、頭枕北方……如来中夜寂然無声。於是時頃便般涅槃。

⑤JM.（p.036, 畑中　p.152）；その後3ヶ月して、ヴィサーカー星宿に満月が宿るヴィサーカー月の満月の日に（ito tiṇṇaṃ māsānam accayena Visākhapuṇṇamiyaṃ Visākhanakkhattayoge vattamāne）世尊はクシナーラー（Kusinārā）のマッラ（Malla　未羅国）の沙羅樹林で、大般涅槃の床についたとき、（ランカー島への布教を説く）……このように言うべきことを言い、なすべきことをなして早朝時日出から3ナーデイー（tināḍī）ほどのちに、無余涅槃界に般涅槃した。

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ p.069, 赤沼　p.407）；仏陀が全く涅槃に入り給うたのは、アニュジャーナ紀元百四十八年のカチヤン月の満月の火曜日の夜の明け切らぬ内であった。

（1）入滅年齢については、本研究の第１号中の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」のpp.115～122を参照されたい。

【72－01】葬儀----火葬

釈尊の遺言にしたがって、クシナーラーの人々は遺体を祀ってから、天冠寺（Makuṭabandhana cetiya）に運んで荼毘に付そうとするが、火がつかない。大迦葉が到着すると自然に火がつき、葬儀が行われる。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.159）；マッラ族の人々は６日の間釈尊の遺体を祀り、第７日目に（sattamaṃ divasaṃ）天冠寺（Makuṭabandhana cetiya）で荼毘に付そうとした（jhāpessāma）。大迦葉が到着したとき自然に火がついた。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.028上）；末羅の人々は釈尊の般涅槃後７日を終わろうとするときに、天冠寺に遺体を運んで荼毘に付そうとした。大迦葉が到着したとき自然に火がついた。

③中阿含068「大善見王経」（大正01　p.518中）；我今得離生老病死啼哭憂慼。我今已得脱一切苦。阿難、従拘尸城、従和跋単力士娑羅林、従尼連然河、従求求河、従天冠寺、従為我敷床処。我於其中間七反捨身、於中六反為転輪王、今第七如来無所著等正覚。

⑦四分律「集法毘尼五百人」（大正22　p.966上）；世尊が拘尸城末羅園娑羅林間で般涅槃されたとき、末羅子が火葬しようとしても火がつかなかった。摩訶迦葉が到着して自然に火がついた。

⑧五分律「五百集法」（大正22　p.190中）；爾時世尊泥洹未久。大迦葉在毘舎離彌猴水辺重閣講堂與大比丘僧五百人俱。皆是阿羅漢唯除阿難。告諸比丘、昔吾従波旬国向拘夷城二国中間聞仏世尊已般泥洹。我時中心迷乱不能自摂……。

⑨十誦律「五百比丘結集三蔵法品」（大正23　p.445下）；仏婆伽婆在拘尸城娑羅双樹間力士住処般涅槃。拘尸諸力士供養仏身。是時長老摩訶迦葉将五百比丘、従波婆城欲到拘尸城二城中間……。

⑩僧祇律「雑跋渠法」（大正22　p.489下）；爾時阿闍世王韋提希子與毘舎離有怨如大泥洹経中広説。乃至世尊在毘舎離於放弓杖塔辺捨寿、向拘尸那城熙連禅河側力士生地堅固林中双樹間般泥洹。於天冠塔辺闍維乃至諸天使火不然。待尊者大迦葉故。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.400下）；涅槃経後７日して、拘尸那城の諸壮士らが遺体を繋冠制底に運んで荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。大迦摂波が到着して自然に火がついた。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.173下）；鳩夷那竭王らは滅度以来７日目に荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。大迦葉が到着してから荼毘に付した。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.189中）；般泥洹後７日して荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。大迦葉が到着して自然に火がついた。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.205上）；涅槃経後７日を満じて諸力士は釈尊の遺体を宝冠支提の所に運んで荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。摩訶迦葉が到着して自然に火がついた。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・下　p.732、Waldschmidt　p.412）；世尊が涅槃されて第７日目に（saptāhāntaraṃ）、マッラ族のマクタ堤にある祠堂で（mallānāṃ makuṭabandhane caitye）火葬に付そうとした（dhyāpayiṣyāmaḥ）。大カーシャパが到着してひとりでに火がついて燃え出した。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.052上）；出於龍象門　度㶟連河表　到諸過去仏　滅度支提所　積牛頭栴檀　……　置仏身於上　……　以火焼其下　三焼而不燃　時彼大迦葉　先住王舎城　知仏欲涅槃　……　願見世尊身　以彼誠願故　火滅而不燃　迦葉眷属至　……　然後火乃燃

⑫BC.（27－70～74）；龍門を通って〔町の〕外へ出て、ヒラニヤヴァティーと言われる河を無事

に渡った後、ムクタ〔バンダナ〕と呼ばれる廟（チャイティヤ）の根元に、名声のゆえに積まれたので〔その名声に相応するだけ大きな薪の〕山を彼ら（マッラ族の者たち）は作った。……道をやって来た〔マハー〕カーシャパ（大迦葉）は清浄な心によって思いをなし、世尊の完全な遺体にまみえたいと思った。その力によって火は燃えなかったのである。それから、そのとき、師（ブッダ）にまみえるためにそこへ比丘（マハーカーシャパ）が急ぎ駆けつけて、最高の牟尼に礼拝すると、たちどころに火はおのずから燃えたのである。

⑬行経（大正04　p.111下）；上於甘樹下　以種種香木　積為大薪積　及若干種香　……　三燒仏薪積　火終不肯燃　……　大迦葉不遠　懐慈往見仏　時火以是故　共吹終不燃　時迦葉至　禮敬仏積已　於是仏薪積　即時自然燃

［C］後世の仏伝資料

③氏譜（大正50　p.094上）；経曰。……那律告阿難入城告知如来已滅度。……沈檀名香積上将欲加火而天滅之。待迦葉故……経云。大迦葉在波波国……知仏滅度詣天冠寺。欲見仏身三請不許。……迦葉遶棺三匝説偈。不焼自然。

④統紀（大正49　p.167上）；時大迦葉與五百弟子在耆闍崛山。去拘尸城五十由旬……見地大動。即知如来已入涅槃。……迦葉説偈。如来復現双足千輻輪相出於棺外。……還自入棺。従心胸中火涌棺外。

⑤JM.（p.036，畑中　p.171）；我々の世尊の遺体を、クシナーラーのマッラ族の人には７日間（sattāhaṃ）聖祭を催したあと、７日目に（sattame divase）火葬した。

⑥Bigandet.（vol.Ⅱ p.078，赤沼　p.420）；かくて御遺骸は天冠寺（Makula bandan）に着き給い、人々はかねて用意の柴堆の上に安置し奉った。……その時大迦葉は五百の比丘を率いて波々から倶尸那羅の途上にあった。（末羅〔Malla〕の人々香木に点火するも燃えず。大迦葉到着すると）火は人手を借らず、独り手に燃え出て、柴堆に移り、火炎を上げた。

【72－02】葬儀----舎利の分配

舎利は８分され、それぞれの国に塔が建立される。この外に、瓶塔・灰塔が建立される。

［A］原始聖典

①DN.016‘Mahāparinibbāna-s.’（vol.Ⅱ　p.164）；世尊の舎利はマガダ王の阿闍世（Rājā Māgadho Ajātasattu Vedehi-putto）、ヴェーサーリーのリッチャヴィ族（Vesālikā Licchavī）、カピラヴァットゥの釈迦族（Kāpilavatthavā Sakyā）、アッラカッパのブリ族（Allakappakā Bulayo）、ラーマガーマのコーリヤ族（Rāmagāmakā Koliyā）、ヴェータディーパの婆羅門（Veṭhadīpako brāhmaṇo）、パーヴァーのマッラ族（Pāveyyakā Mallā）、クシナーラーのマッラ族（Kosinārakā Mallā）に八分され、瓶はクンバ婆羅門（Doṇo brāhmaṇo）、灰はピッパリーヴァナのモーリヤ族（Pipphalivaniyā Moriyā）に与えられた。

①‘Buddhavaṃsa’（p.068）；勝者マハーゴータマはクシナーラーにおいて涅槃され、舎利の分割（dhātuvitthārika）が行われた。１つはアジャータサットゥへ、１つはヴェーサーリーの都へ、１つはカピラヴァットゥへ、１つはアッラカッパカへ、１つはラーマ村へ、１つはヴェータディーパカへ、１つはパーヴァーのマッラ族へ、１つはクシナーラーへ。香姓婆羅門は瓶塔を築き、モーリヤ族は灰塔を建てた。

②長阿含002「遊行経」（大正01　p.030上）；時拘尸国人得舎利分、即於其土起塔供養。波婆国人.遮羅国、羅摩伽国、毘留提国、迦維羅衛国、毘舎離国、摩竭国阿闍世王等得舎利分已、各帰其国、

起塔供養。香姓婆羅門持舎利瓶帰起塔廟。畢鉢村人持地燋炭帰起塔廟。

⑨十誦律「五百比丘結集三蔵法品」（大正23　p.446下）；爾時拘尸城諸力士得第一分舎利。即於国中起塔、華香伎楽種種供養。波婆国得第二分舎利……。羅摩聚落拘楼羅得第三分舎利……遮勅国諸刹帝利得第四分舎利……。毘鬼諸婆羅門得第五分舎利……。毘耶離国諸梨昌種得第六分舎利……。迦毘羅婆国諸釈子得第七分舎利……。摩伽陀国主阿闍世王得第八分舎利……。姓煙婆羅門。得盛舎利瓶還頭那羅聚落起塔華香供養。必波羅延那婆羅門居士得炭還国起塔供養。爾時閻浮提中八舎利塔第九瓶塔第十炭塔。仏初般涅槃後起十塔自是已後起無量塔。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.402中）；第一分與拘尸那城諸壮士等広興供養。第二分與波波邑壮士。第三分與遮羅博邑。第四分與阿羅摩処。第五分與吠率奴邑。第六分與劫比羅城諸釈迦子。第七分與吠舎離城栗姑毘子。第八分與摩伽陀国行雨大臣。此等諸人既分得已、各還本処起窣覩波。恭敬尊重伎楽香華盛興供養。時突路拏婆羅門将量舎利瓶、於本聚落起塔供養。有摩納婆名畢鉢羅、亦在衆中告諸人曰。釈迦如来恩無不普、於仁聚落而般涅槃。世尊舎利非我有分、其余炭燼幸願與我。於畢鉢羅処起塔供養。

⑫白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01　p.175上）；辺境の八国の王たちが仏舎利を求めて集まった。屯屈という梵志が仲裁して八分した。道士の桓違は焦炭を得、遮迦竭人は灰を得た。

⑫失訳「般泥洹経」（大正01　p.190上）；拘夷王、波旬国の諸華氏、可楽国の諸拘鄰、有衡国の諸満離、神州国の諸梵志、維耶国の諸離揵、赤澤国の諸釈氏、摩竭王阿闍世が舎利を８分し、梵志温違は地燋炭、有衡国の異道士は地灰を得た。

⑫法顕訳「大般涅槃経」（大正01　p.207上）；韋提希子阿闍世王、余七国王及毘耶離の諸離車等は舎利を８分し、調停の労を取った徒盧那婆羅門は舎利瓶、諸力士は灰炭を得た。

⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・下　p.732、Waldschmidt　p.412）；世尊の舎利は、クシナガラのマッラ族（Kauśināgarāṇāṃ mallānām）、パーパーのマッラ族（Pāpīyakānāṃ mallāṇāṃ）、チャラカルパのブラ族（Calakalpakanāṃ bulakānām）、ヴィシュヌ・ドヴィーパのバラモン（Viṣṇudvīpīyakānāṃ bulakānām）、ラーマ・グラーマのクラウディヤ族（Rāma-grāmīyakāṇāṃ krauḍyānām）、ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族（Vaiśālakāṇāṃ licchavīnām）、カピラヴァストゥのシャーキヤ族（Kāpilavāstavyānāṃ śākyānām）、マガダのアジャータシャトル王（rājā Māgadho 'jātaśatrur vaidehīputro）に８分され、瓶はドゥームラ姓のバラモン（Dhūmrasagotrāya brāhmaṇāya）に与えられ、炭は学生であるピッパラーヤナ（Pippalāyana māṇava）が取って、それぞれ塔を建てた。

［B］仏伝経典

⑪仏讃（大正04　p.052中）；彼諸力士衆　……　興無上供養　時七国諸王　承仏已滅度　遣使詣力士　請求仏舎利（諸力士衆と七王の争いを梵志が仲裁する）

⑪仏讃（大正04　p.054上）；即開仏舎利　等分為八分　自供養一分　七分付梵志　七王得舎利　……　梵志　……　得分舎利瓶　……　金瓶塔　……　俱夷那竭人　聚集余灰炭　……　灰炭塔　……　如是閻浮提　始起於十塔

⑫BC.（28－01）；正しい仕方で数日の間彼ら（マッラ族の者たち）はそれら〔の遺骨〕を最上の供養で供養した。すると、属国の小王の使者が七人、次々とその〔遺骨の〕ためにその〔クシナガラの〕町へやって来た。（マッラ族と七王の争いあり。バラモン「ドゥローナ」が仲裁する）それから……（ブッダ）の遺骨をマッラ族の者たちは八つに尊敬と徳をもって分けた。自らは〔自らの取り〕分を受け取って〔他の〕七〔部分〕をそれぞれ他の者たちに与えたのである。

⑬行経（大正04　p.112上）；諸力士悲感　在於王殿上　供養尊舎利　如是至数日　隣側七国王　時各尋遣使　……　求得舎利分

⑬行経（大正04　p.114下）；即時以金甓　分聖尊舎利　別以為八分　……　於是諸力士　従中取一分　致其余七分　送與七国王　……　於是七国王　各各自於国　興師建神塔　……　梵志草香性　欲己聚起塔　……　金甓塔第九　仏積炭灰塔　満十妙巍巍

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.074下）；釈迦八国分舎利記。（出双巻泥洹経）

④統紀（大正49　p.167中）；二月二十九日。如来荼毘已経七日。帝釈……、……取仏右牙、天上起塔。有二捷疾羅刹、盗取仏牙一双。時城内大衆収取舎利満八金壜、入拘尸城七日供養。三月六日、……時八国王共争舎利、有大臣優波吉諫八国王。……。……即分舎利而為三分、一分諸天、一分龍王、一分八王……。……姓煙婆羅門高声唱言、当作八分、時拘尸城得第一分、乃至閣王得第八分。……姓煙婆羅門得盛舎利瓶、……羅延婆羅門得炭。……是時閻浮提始有十塔。

⑤JM.（p.037，畑中　p.172）；クシナーラーのマッラ族（Kosinārakā Mallā）の人には、７日間（sattāhaṃ）遺骨を供養して７日目に（sattame divase）分配した。……8つの舎利塔、第９の瓶のCetiya、第１０の灰塔が同時に立てられた。

⑥Bigandet.（vol. II　p.094，赤沼　p.435）；諸王の使臣は徒盧那（Dauna）の語に従って、徒盧那について御遺骨を八分せんことを願った。